

## 『続修四庫全書』と四庫関連叢書

吾妻重二

### 一

このたび本学図書館に『続修四庫全書』が購入されたのにちなんで、『続修四庫全書』と四庫全書、および関連叢書についてその特色と意義を述べてみたい。

清の乾隆帝が当代屈指の学者を結集し、全国の書物をあまねく収集して『四庫全書』を編纂させたことは周知のところであろう。集められた書物の底本は(一)勅撰本、(二)内府蔵本、(三)永楽大典本、(四)各省採進本、(五)私人進献本、(六)通行本の6種類であり、十年近くの歳月を費やして大規模な校勘、編集、繕写を進め、乾隆46年(1781)に至ってようやく正本の完成をみた。書式を半葉8行、行21字で統一し、各書の巻頭に当該書籍の解題すなわち「提要」を載せ、全体を経・史・子・集の伝統的な四部分類によって整理している。また、経部は緑色、史部は紅色、子部は藍色、集部は灰色の表紙を用いるという装訂をとった。収録書籍3400余种、79000余巻、包背装約36000冊からなる空前の一大叢書が、こうしてできあがったのである。

四庫全書編纂と同時に専用の書庫も建てられた。宮廷内の文淵閣には完成した正本を収蔵し、さらにこれを複写してつくった副本を、奉天故宮(現在の瀋陽市)の文溯閣、北京円明園の文源閣、熱河避暑山荘(現在の承德市)の文津閣にそれぞれ収めた。以上がいわゆる「内廷四閣」であるが、一般人の閲覧に供するために、さらに揚州大観堂に文匯閣、鎮江金山寺に文宗閣、杭州聖因寺に文瀾閣を建てて各一部を蔵した。これが「江浙三閣」で、結局のところ合計7部のテキストがつけられたことになる。

四庫全書の編纂は、康熙朝の『古今圖書集成』や『康熙字典』、『佩文韻府』と並んで清朝の学術上の熱意と力量をよく象徴する事業であり、民間における学術振興にも多大な寄与をもたらすことになった。

四庫全書編纂の副産物として『四庫全書総目』(四庫提要)が作られたことも重要である。これは全書籍の「提要」に補訂をほどこして成ったもので、のちに単行本として刊行された。『総目』が、その収録範囲の広さ、記述の篤実さにおいて、まず最初に参照すべき中国書の総合解題として現在なお我々を裨益していることはいうまでもなからう。

ところが清末以降、四庫全書は幾多の変遷をたどった。まず文淵閣本であるが、1933年、日本軍の侵略を避けて故宮内からまるごと上海に搬出され、以後、中国各地を転々としたあと、人民共和国成立直前に台湾に運ばれた。現在は台湾・故宮博物院の所蔵となっている。

文溯閣本は清末の混乱の中で一部分を亡失した。1914年、北京の故宮保和殿に移され、のちに瀋陽にもどされて、欠巻の補写が行なわれたという。その後、1966年、おそらく文革の混乱を恐れてであろう、蘭州の甘肅省図書館に移管され、現在もその所蔵となっている。

文源閣本は咸豊10年(1860)のいわゆるアロー戦争の際、英仏聯合軍が円明園を焼き払ったことで、文源閣もろとも灰燼に帰した。

文津閣本は1915年、熱河から北京の京師図書館に移され、1931年、北海西側に京師図書館新館が建てられて全書が移管された。なお、その際、本書にちなんで新図書館前の通りが「文津街」と改められたことは、中国の学術において四庫全書がいかに象徴的な意味をもつかを物語るものであって、その通りの名は今も残っている。現在は白石橋西側にある北京図書館(国家図書館)に所蔵される。

文匯閣本および文宗閣本は、咸豊3年(1853)、太平天国軍の焼き討ちに遭って亡佚した。

文瀾閣本もまた咸豊11年(1861)、太平天国軍の攻撃によってかなりの部分が散佚したが、その後、失われた部分を補抄によって補ったという。1911年、

浙江公立図書館（のちの浙江省立図書館）の所蔵となり、現在に至っている。

このように、現在のところ完全なかたちで残っているのは、台湾の文淵閣本と北京図書館の文津閣本の二種類だけである。また、文淵閣本と文瀾閣本は一部を亡失したものの、補抄によってもとの姿をかなり回復していることになる。筆者は中国留学時代の1981年に杭州の文瀾閣本を、1982年に北京図書館の文津閣本を見たことがあるが、とりわけ文瀾閣内では故・山井湧東大教授に同伴したこともあって、係員は「貴重な宝を大切な客人にご覧いれましょう」とでもいいかげん、いかにも満足そうな表情をしていたのが印象的であった。この時に、散佚書を補写によって補ったという説明を受けたこともよく憶えている。

わが内藤文庫には文淵閣本の書物が三点蔵されている。すなわち経部の『瑟譜』、『韶武九成楽補』、および集部の『雁門集』がそれで、おそらく清末民国初の混乱期を経て湖南の所蔵に帰したものであろう。これはわが国でじかに見ることのできる数少ない四庫全書であって、本学所蔵の貴重書として特筆しておかなければならない。

## 二

さて、四庫全書は民国以降になって影印本の出版が行なわれるようになった。まず、1934年から翌年にかけて、上海・商務印書館から『四庫全書珍本』初集が線装本じたてで刊行された。これは文淵閣本のうち230種のみを影印したものであり、戦後さらに台湾・商務印書館から二集～十二集および別集の洋装本がひき続き出版された。これらを合計すると1878種になり、四庫全書全体の約半分がここで影印されたことになる。

この『四庫全書珍本』は我々研究者をながく裨益してきたのであったが、1986年になって、ついに四庫全書のすべてが影印された。台湾の商務印書館本がそれで、上述した台湾故宮博物院蔵の文淵閣本を影印した画期的な出版であった。洋装1500冊、目録1冊からなっている。そして翌年の1987年に、上海古籍出版社からこの商務印書館文淵閣本が縮小されて影印、出版された。本学が所蔵する四庫全書はこの上海古籍出版社本である。

四庫全書の影印によって『四庫全書珍本』の価値はだいぶ減少したといえよう。しかし、まったく無

価値になってしまったのではない。というのは、『四庫全書珍本』（初集）は朱筆部分をそのまま朱で印刷しているという特徴があるからで、これに対して、影印本四庫全書は白黒による印刷であるために朱筆が黒い文字になってしまっている。そのことはたとえば、南宋・方崧卿の『韓文拳正』を見るとわかる。この書は韓愈の文集の校勘記であり、削除すべき誤字を朱筆で記しているのであるが、影印本四庫全書ではそれが黒字になっていて他の字と区別できないのである。このほか、書中に描かれた図版も『四庫全書珍本』の方が大きくて、ずっと見やすい。こうしたことを考えると、『四庫全書珍本』はまだ無用にはなっていないわけである。

また、2000年には上海人民出版社・迪志文化出版有限公司から文淵閣四庫全書の電子版が出た。CD-ROM175枚にすべての書籍が収められている。10GB程度のハードディスクにこれをインストールすれば全文検索がたちどころにできるようになっていて、本書の利用をいっそう促進する、きわめて便利なツールということができる。

これらは四庫全書の影印出版にかかわる事項であるが、近年、関連叢書の出版も相継いでいるので、ついでに紹介しておきたい。

まず、『四庫全書薈要』の影印がある。『四庫全書薈要』は四庫全書のうち重要と目される書物を収めた一種のダイジェスト版で、書籍463種、包背装約11000冊からなる。乾隆43年（1778）から翌年にかけて完成し、宮中の摛藻堂と円明園の味腴書屋にそれぞれ一部を蔵した。その後、円明園の味腴書屋本は文源閣とともに焼失し、あとに残った摛藻堂本は現在、文淵閣四庫全書とともに台湾・故宮博物院に蔵されている。この摛藻堂本は台湾の世界書局から影印本が出版され、1988年に全冊が刊行した。また、1997年、吉林人民出版社からも洋装100冊として影印され、本学図書館にも所蔵されているが、この吉林人民出版社本は摛藻堂本のうちの150種のみ、三分の一ほどを収めただけで、いわばダイジェスト版のそのまたダイジェスト版というべきものなので注意を要する。

四庫全書のテキストに関する校勘作業も発表されている。台湾・商務印書館から1995年以降刊行されている『四庫全書補正』は、文淵閣本を他の諸本によって校勘したもので、現在までのところ、経部・史部・子部各1冊が出版されているようである。

1997年には北京図書館出版社から『四庫全書補

遺』(集部)全15冊が刊行された。これは、文津閣本にあって文淵閣本にない部分を取り出して影印したものである。前に述べたように、文津閣その他の6テキストはいちおう正本の文淵閣本を複写したもののなのであるが、実際には完全には一致せず、文字や収録作品に少なからぬ違いがある。この『四庫全書補遺』は、そうしたテキストの異同出入を明らかにしたものであって、校勘学上の貴重な成果というべきである。ただし、これまでに公刊されたのは集部のみなので、続編が待たれるところである。

このほか、四庫全書関連の一大叢書として『四庫全書存目叢書』が出版されたことも見落とすことができない。もともと四庫全書の編纂過程において、すべての書物は「存書」と「存目」の二つに分類されていた。存書とは価値ある書物として四庫全書中に収録されたものをいい、存目とはただその書目のみを記録するのにとどめたものをいう。これらの書籍はともにその解題が『四庫全書総目』に載せられているので、それによって数えると、存目の書籍は6700余種あって、存書の書籍3400余種のほぼ二倍の数にのぼる。存目書の方が、じつは四庫全書所収の書籍よりもずっと多いわけである。そこで1997年、齊魯書社および台湾の莊嚴文化事業有限公司が、存目書のうち現存する書籍4508種を選び、『四庫全書存目叢書』として影印、出版したのである。洋装1500冊、目録1冊という巨大な叢書であって、これまた研究者に多大な便宜を提供することになった。本学には、台湾・莊嚴文化事業有限公司本が所蔵されている。

### 三

前置きが長くなったが、次に『続修四庫全書』について紹介したい。

四庫全書を継ぐ『続修四庫全書』の編纂は、じつは清末から民国時期にかけてしばしば要請されていたのだが、これまで実現したことがなかった。その過程の中で記憶にとどめておきたいのは、北京(北平)人文科学研究所の活動である。1925年、日本政府は義和団事件の賠償金を用いて北京に東方文化事業総委員会を設立し、北京人文科学研究所および上海自然科学研究所を日中共同で運営することにした。このうち、北京人文科学研究所の主な事業が、ほかならぬ続修四庫全書の編纂と提要の作成だったのである。詳しい経緯は山根幸夫氏の『続修四庫全書

総目提要』と『続修四庫全書』(『汲古』第36号)に譲るが、四庫全書の続修が結局成らなかったのに対し、提要の原稿は戦時中の困難をのりこえて作成された。それはのちに『続修四庫全書総目提要』として刊行され、『四庫全書総目』を補う漢籍解題として利用することができるようになった。

さて、このようになかなか実現しなかった四庫全書の続修であるが、2002年に至って、上海古籍出版社からようやく『続修四庫全書』が出版された。

まず、1994年、中国出版工作者協会の主催により、『続修四庫全書』の編纂事業が正式に始められ、続いて続修四庫全書工作委員会および同編纂委員会が組織された。主編は顧廷龍と傅璇琮、常務副主編は李致忠があたり、学術顧問として史念海、任繼愈、李学勤、周紹良、柳存仁、胡道静、宿白、啓功、張岱年、張政烺、程千帆、湯志鈞、樓宇烈、錢存訓、錢仲聯、戴逸、饒宗頤といった中国を代表する学者が名を連ねている。国家重点出版項目にも指定され、国家的プロジェクトの一環として作業が進められることになった。経費は広東省深圳市南山区人民政府と上海古籍出版社が出資した。

調査の対象は国家図書館(北京図書館)、上海図書館、南京図書館、天津図書館、浙江図書館など82機関にわたり、全国の図書館の関連蔵書が網羅的に集められた。こうして約8年にわたる収集、整理、影印作業を経て、全5212種、洋装1800冊(経部260冊、史部670冊、子部370冊、集部500冊)、目録1冊からなる『続修四庫全書』が出版されたのである。収録書籍5212種というのは四庫全書の約1.5倍に相当する分量であって、その規模の大きさが知られるというものである。また四庫全書にならって、経部は緑色、史部は紅色、子部は藍色、集部は灰色とい



架蔵された『続修四庫全書』



う装訂がとられた。

本書編纂の方針は、その「凡例」によれば、おおむね次のとおりである。

一、四庫全書編纂以後、清末までに著わされた学術的著作を中心に収録する。

二、具体的な収録範囲は次のようにする。

- (1) 四庫全書に収録が見合わされた学術的著作
- (2) 四庫全書の存目書のうち、学術的価値があると認められるもの
- (3) 四庫全書に収録されていても、他に善本があるものはそれを載せる
- (4) 四庫全書に収められなかった乾隆・嘉慶以降の重要な著述
- (5) 四庫全書に収められなかった戯曲・小説、文学的価値があるもの
- (6) 国外所蔵の書籍で本書編集の条件にかなうもの
- (7) 新出土の簡帛で一定のまとまりをもったもの

これらのうち、第4項目に全体の比重を置く。

三、学術的価値を重視するという方針により、曆書、家譜、登科録、縉紳録などの一般的資料は収録しない。兵書や医薬書の類は厳選したうえで収める。仏教書は中国撰述のすぐれたもののみを取る。

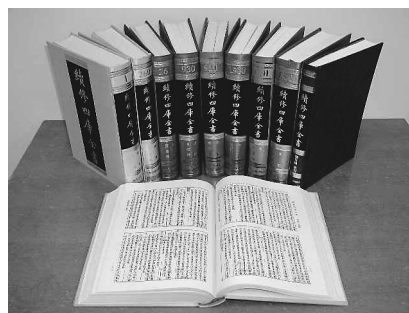
四、「粗を去って精を取る」の原則に従い、まずは学術的価値を重視し、次に版本の価値を置く。所収の書籍はすべて善本を選んで影印する。

五、四庫全書にならひ、経・史・子・集の四部分類によって編集する。

六、内容が多部門にわたる叢書は収録しない。同一類の彙刻・叢書の場合は該当する部類に編入する。個人の全集は集部に収めるが、それ以外の個別的な著述は、これまた該当する部類に編入する。

このように、本書最大の特色は、四庫全書以後に著わされた学術的著作を中心に影印収載するところにある。まさに「続修」の名にふさわしい作業といえよう。そもそも四庫全書の編纂にかかわった数多くの学者の著作自体、四庫全書に収められていないのであって、紀昀、戴震、邵晋涵、周永年、姚鼐、翁方綱、朱筠、彭元瑞、任大椿、孫希旦、王念孫、莊存与、謝墉らの著述は四庫全書にはじつは一篇も収録されていない。本書は、こうした名だたる学者の著作はもちろん、清朝学術の黄金時代といわれる

乾隆・嘉慶時代およびそれ以降の書物を広く収録しているわけで、この清朝部分の書籍の豊富さはまさに圧巻というべきである。



経部は緑、史部は紅、子部は藍、集部は灰色の装訂

いくつか具体的な例を挙げてみよう。夏炘『述朱質疑』16巻（第952冊）および朱沢潏『朱子聖学考略』10巻（第946冊）は王懋竑の仕事と並ぶ朱熹研究の白眉であるが、所蔵は稀である。このうち『朱子聖学考略』は前述の『存目叢書』にも収められてはいるが、『存目叢書』の方は旧鈔本で、「提要」「正訛」「付録」などは付されていない。書物としてどちらが利用しやすいかといえば、やはり『続修四庫全書』本の方であろう。曹元弼『礼経校釈』22巻（第94冊）、張錫恭『喪服鄭氏学』16巻（第96冊）、林喬蔭『三礼陳数求義』30巻（第109冊）、黄以周『礼書通故』50巻（第111-112冊）など、清朝後期を代表する礼学研究ももちろん収められている。また、清初の姚際恒『儀礼通論』17巻（第86-87冊）は中国社会科学院歴史研究所に蔵する鈔本で、おそらく天下の孤本と思われるが、顧頡剛の識語を巻頭に付して忠実に影印されている。

清朝の経学研究に関して、これまでよく用いられてきたのは『皇清経解』および『皇清経解続編』であるが、上記の書物はそのどちらにも未収録で、従来、容易に見ることのできないものであった。また『皇清経解』『皇清経解続編』との関連でいえば、翟灏に『四書考異』72巻の著がある。この書は四書研究に欠くべからざるものとされているが、『皇清経解』本はそのうちの半分、すなわち「条考」36巻を収めるだけで、かんじんの「総考」36巻を欠いていた。筆者は、どこかの出版社でこの書の完本を影印出版してくれないものかとかねがね思っていたところ、最近、本学の長澤文庫に全72巻が収められているのを知った。そして今回、『続修四庫全書』の第167冊にこれが影印されているのを知ったのである

が、節略本でなく完本を影印するという本叢書の方針は心強いかぎりである。

このほか、清代以前の著述にも貴重なものが収められていることがわかる。たとえば、第42冊に収める元版の宋・陳大猷『書集伝』12巻、『或問』2巻は、四庫全書では『或問』のみを収め、『書集伝』の方は散佚したとされていたものである。また、第1378-1379冊には明の学者であり戯曲家であった梅鼎祚の詩文集として『鹿裘石室集』65巻を収めるが、四庫全書では存目中に『梅禹金集』20巻を著録しただけであった。ところが本書編集部は明末の天啓年間に刊刻された足本を見出してこれを影印収録しているのである。四庫全書には明代の著述を空疎なものとして軽視する傾向があるのだが、『続修四庫全書』は明代の書物についても十分な目配りをしていると見受けられるのである。さらに、第973冊に収める『名公書判清明集』の明版足本14巻、第826冊に収める宋・晁公邁『歴代紀年』10巻の宋版などは、おそらくいずれも孤本であって、貴重な資料であることはいうまでもない。

以上、目についた事例を挙げてみたにすぎないが、これをもってしても本書の特色を十分窺うことができるであろう。総じて、収録範囲の広さのみならず、版本の選定についてもしかるべき注意が払われ、学術的に高い価値をもつ叢書となっているのである。

なお、本書の「編纂縁起」によれば、現在、収載の書籍のすべてについて提要の執筆を研究者に依頼しており、いずれ『続修四庫全書総目提要』として公刊する予定だという。書物の解題を書くというのは労力のいる仕事であるが、出版のあかつきには研究者必携の工具書となることであろう。

#### 四

最後に、他の四庫関連の叢書について触れておきたい。これまで紹介してきた叢書はおおむね本学図書館に架蔵されているのであるが、まだ所蔵されて

いないものもある。主なものは次の三種である。

- ・『四庫全書存目叢書補編』全100冊  
齊魯書社 2001年
  - ・『四庫禁毀書叢刊』全311冊 北京出版社 2000年
  - ・『四庫未収書輯刊』全300冊 北京出版社 2000年
- 最初の『四庫全書存目叢書補編』は、諸事情から『存目叢書』に未収録となった四庫存目書219種を収めたものである。次の『四庫禁毀書叢刊』は、清代において禁毀の対象となった書物のうち約1500種を収めている。清代の禁書はきわめて多数にのぼるが、ここにはそのうちの現存する書籍が可能な限り集められている。最後の『四庫未収書輯刊』は表面上、四庫全書に漏れた書籍を収録するという点で『存目叢書』および『続修四庫全書』と似ているが、編集のよりどころとなったのは、前述の北京(北平)人文科学研究所がかつて編纂した『四庫未収書分類目録』らしい。そして、『存目叢書』および『続修四庫全書』と重複する書籍は収録からはずしてあるということである。

大型叢書を次々と出版する中国の出版界の活況ぶりにはただただ驚かされるばかりであるが、これらの三種もまたいずれ劣らぬ特色ある叢書であって、『続修四庫全書』に続いてぜひ本学への架蔵を望みたいところである。

#### 参考文献

- 郭伯恭『四庫全書纂修考』  
(台湾・商務印書館 人人文庫 1967年)
- 黄愛平『四庫全書纂修研究』  
(中国人民大学出版社 1989年)
- 『続修四庫全書 縁起編例 経部目録』  
(上海古籍出版社 パンフレット)
- 『古籍整理出版的宏偉工程 《続修四庫全書》』  
(上海古籍出版社 2002年)
- 山根幸夫「『続修四庫全書総目提要』と『続修四庫全書』」(『汲古』第36号 1999年)  
(あづま じゅうじ 文学部教授)